こんなところに

1、富士山のように
　広く 思いやりの心をもち
　たがいに助け合います

旅の老人を助けた富士市民

東京・太田区に住む下山栄治さん(72歳)から、お便りをいただきました。

下山さんは3月26日の深夜、一人でハンドルを握り東名高速を運転していました。富士の手前でガソリン不足に気がつき、やむを得ず富士インターで降りてガソリンスタンドへ行きましたが、何せ深夜、開いていません。

偶然信号で止まった女性の運転手に尋ねると、一緒に近くの店を案内してくれました。しかし、やはり開いていません。すると、その女性は家に帰り、御主人とともにポンプを持ってきてくれました。ところが、ポンプが届かず、御主人は下山さんの車を運転して、国道を三島までスタンド探しを行ってくれました。三島でとうとう燃料切れとなり、たまたま奥さんの実家が近くだったので、再びポンプを取りに行き、給油できました。

帰りは沼津インターまで案内をしてくれ、お礼も受け取らず、名前も告げずに去ったということです。

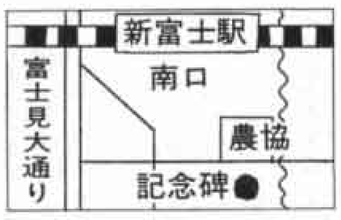
下山さんは「富士市は終生忘れ得ぬ地名となった」とお便りをくれました。

ふるさとの昔話

川成島の旗立八幡

市内には武田信玄に関する史跡が、幾つかあります。今回は、その一つ川成島の「旗立八幡」のお話を地元の三井清治さん(六十六歳)に教えていただきました。

◁三井さん



川成島に陣を張る

戦国時代のことです。富士市は甲斐の武田・駿河の北条・相模の今川氏の勢力がぶつかりあったところでした。

永禄十二年(一五七〇年)六月十二日、武田信玄は一万八千の軍を率いて甲府を出発し、駿府を目指しました。沼津・三島の北条軍を破った後、武田軍は富士川を背にして川成島に家宝の「八幡大菩薩」の旗を立て、陣を張りました。

一方、北条氏康は元吉原の砂山に陣取り、対陣しました。

洪水に慌てた武田軍

にらみ合いの始まった六月十九日ごろのことです。雨が降り出し、夜には大雨となりました。

かりがね堤のできていない当時の富士川は、大雨のたびに本流が変わる暴れ川で、たちまち大洪水となりました。

信玄の陣地は水浸しとなり、武田軍は命かながら大宮(富士宮市)へ逃げ延びました。慌てた武田軍は「八幡大菩薩」の軍旗を置き忘れ、旗は寂しく立ち残っていました。北条軍はこれを拾い、小田原城へ持ち帰りました。

村人は軍旗のあったところに社を建て、旗立八幡と呼ぶようになりました。現在は川成島浅間神社に合祀され、跡地に記念碑を建ててあります。

信玄びいきだね

三井さんは「信玄が陣を張ったということは、武田に味方する地侍が、ここにいたということです。そのせいか、今でも川成島の人は概して信玄びいきですよ」と語ってくれました。

△記念碑

地名の由来

十兵衛

十兵衛村の開発は、横割村の開発者伊藤八左衛門の子清右ェ門だと伝えられています。それは古郡氏の加島新田の開発より九十年ほど前のことでした。

一説では笹山十兵衛の開発だから十兵衛村と呼んだという説もありますが、確かなことは判りません。

幕末の支配者は、旗本石川又四郎と旗本日向小伝太の相給でした。

こちら編集室

富士市の平成元年度の一般会計予算は、本号でお知らせしたように五百三十四億円。日ごろ大金に縁のない編集室の面々には、この額がピンときません。ちなみに一千万円の厚さは約十二㌢といいますから、五百三十四億円は、約六百四十㌔になります。市役所十六個分の高さになるとあって、「うーん。納得」

発　行・富士市役所　富士市永田町1丁目100番地　☎51－0123　人　口　222,046人　男　110,189人　女　111,857人
編　集・総務部広報広聴課　　世帯数　64,613世帯　（5月1日現在）